

「文明開化期のちりめん本と浮世絵」雑考

奥 正敬

はじめに

本学図書館が学校法人創立60周年記念稀観書展示会として開催した「文明開化期のちりめん本と浮世絵」はお陰様で大変な好評を博しました。「ちりめん本」、そして「開化絵」、「横浜絵」、何れも現在社会で生活をしている私たちが、遠くに忘れ去ってきたものかも知りません。百数十年前の日本人がこのようなものを残していたのかと確認されるためか、多くの方々に見学していただきました。本稿では、この展示会を開催して感じた当時の日本の環境や日本人と外国人について考えてみたいと思います。

鎖国中に日本人が見た外国人

嘉永6(1853)年にアメリカのペリー提督が来航しました。その翌年に再来日をしたペリーと徳川幕府は日米和親条約を締結しました。この年から翌年にかけて幕府はイギリスやロシアなどヨーロッパ諸国とも和親条約を結び、下田や函館に滞在する外国人も次第に増えていきます。この頃の

多くの日本人は、それまで殆ど見たことのない欧米人を非常に恐れていたようです。右の絵はペリー提督を描いた版画で、開化絵の初期のものとも見なすことができますが、とても厳つい顔に描かれています。



ペリー提督を描いた瓦版
(本学図書館所蔵)

攘夷派台頭の中で外国人を描く浮世絵師たち

安政6(1859)年になると幕府はアメリカ、イギリス、フランス、オランダ、ロシアに対して神奈川、長崎、函館の三港を開港します。江戸に近い神奈川横浜村の沖には多くの外国船が停泊し、その村にも多くの外国人が逗留するようになりました。この頃から国内の攘夷派の勢いが増し、ヒュースケン襲撃事件に見られるように外国人が頻繁に殺害されるようになりました。従って外国人が戸外へ出ることは大変な危険が伴うことであつたと思われます。江戸にあって美人画、風景画、役者絵などに限界を感じてい

た浮世絵の版元達は、多くの絵師を横浜へ派遣しましたが、外国人に密着してその生活を描く絵師たちも命がけの心境ではなかったかと推測できます。このような中で、一川芳員が万延1



一川芳員「異国人酒宴遊楽之図」(本学図書館所蔵)

(1860)年に描いた「異国人酒宴遊楽之図」には、婦人や子どもたちを交えた楽しそうなパーティの様子が現されています。

文明開化の象徴「鉄道」を描き、そして衰退へ

世が明治となり新政府が樹立されると、国策としての社会の近代化政策が急進展をします。所謂、「文明開化」、そのたけなわの時期です。明治政府が中心となって「お雇い外国人」を招聘し、学者や技術者などが大挙して日本にやってきます。浮世絵師達は外国人の宴会や異国風の町の様子、さらには港内の黒船などを題材にしていますが、明治5(1872)年には品川と横浜間に鉄道が開通し、絵師たちは競って文明開化の象徴ともされる鉄道を描きました。



昇齋一景「高輪鉄道蒸気車全図」(本学図書館所蔵)

しかし、その後の開化絵や横浜絵は写真の普及などで次第に衰退し、これらの浮世絵の技法は「ちりめん本」にも受け継がれていきます。

ちりめん本の祖、長谷川武次郎と外国人たち

明治のはじめ、外国人を相手にする商売も現れました。ちりめん本を初めて作ることになる長谷